

日本語教育における多読活動についての一考察

A Discussion of Extensive Reading Activities in Japanese Language Education

大瀨 瞳

Hitomi OBUCHI

鳴門教育大学大学院 グローバル教育コース

Global Education Course, Graduate School, Naruto University of Education

要旨

日本語教育における多読学習について考察する。レベル別の読み物は近年刊行されているものの、その存在を知る日本語学習者は多くはなく、教育現場で取り上げられなければその存在を知らないまま学習が進むことも少なくない。評価の都合で日本語教育では多読が取り入れられることは決して多くはないが、教育における評価とはどのようにあるべきなのか。また、そもそも多読の目的とは、文字通り多く読むことなのだろうか。多読の認知度、目的、そこから広がる活動や課題の考察を行う。

キーワード：日本語教育、多読、多読から繋がる活動、ブックトーク、多読学習の認知度

1. はじめに

近年、日本語教育においても多読用の教材がよく見受けられるようになってきた。外国語習得における多読については、明治期の英語学者である井上十吉もその重要性について触れており、「自分として確信して後進生に御薦めの出来るのは学力以下の本で自分の趣味に適したものを成るべく沢山読む事」（江利川，2018, p.36）と述べている。この文面が収められている書籍が発行されたのは1918年であり、つまり外国語学習において多読は100年以上前から推奨されているということがわかる。

しかしながら、多読の重要性については説かれているものの、それはあくまでも個人的な読みの勉学を補うものとして取り入れられることが多い。教育現場で多読が大々的に取り上げられる場面は決して多くないように感じられる。それは教育現場においては多読活動が評価につながりにくい部分も持ち合わせているからであるが、その点は大越（2019）も「教師が評価をしないことを前提とする学習法なので、単位を出す正規授業内においては、多読学習のみだと学期末の成績評価に憂慮する」（p.96）と指摘している。しかし、教育の場で多読学習に触れる機会がなければ、学習者

が多読についての存在を知ることにもまた、難しさがあるのではないか。加えて、評価がなければそれは教育として成り立たないのか、その根本的な点についても考えさせられる。

日本語教育分野での多読についても、様々なレベルの教材が発刊され続けているが、その種類は他言語のレベル別の多読読み物と比較すると、豊富な選択肢があるとはまだ言い難い。栗野他（2012）も、「『日本語のレベル別読み物がない』という現実の壁に突き当たった」（p.30）と述べているが、正しくその通りであると考ええる。具体的な例として、英語多読ではPenguin Random Houseが出版しているPenguin Readersシリーズを挙げる。作品情報が公開されている数は、Penguin Readersのホームページで確認できるだけでも、99冊に上り、岡山県立図書館の蔵書リストで確認してみると420冊を超えている。一方の日本語多読では、刊行数が多いレベル別日本語多読ライブラリーシリーズ（アスク出版）でも、78冊となっている。加えて、ウェブ上にも無料の読み物が71冊提供されているものの、日本語教育における多読は費用面やライトの作業等に困難点があることも考えられ、それにより読み物の充実度、その支援法やアプローチ法、読後の活動も含め、まだまだ開拓途中であると

言えるであろう。

2. 多読学習の目的と強み

多読学習については、多く誤解されていることもあるようだ。それは文字通り、「多読」とは読み物を「多く読む」と解釈されている点である。これは前述した英語多読の Penguin Readers のハンドブック (2019) にもその旨について次のように表記がある。

Graded readers encourage “extensive reading,” which means reading texts for pleasure, to extract information and to develop reading skills. [...] As a result, extensive reading helps to rapidly increase reading speed and fluency.

(レベル別多読では、“extensive reading”を勧めている。それは読む喜びのためのものであり、そして情報を取り出し読解力を伸ばすためのものである。(中略) 結果として、多読は読む速さと流暢さをスムーズに伸ばす手助けとなる。)

(p.4, 筆者訳)

上記にあるように、多読は本を読むその喜びや楽しみを見出すことに重点を置いており、数を多く読むことを目的として推奨しているわけではない。筆者も現在実践しているオンライン多読ブックトーク¹を通して、結果的に読んだ書物の数が多くなっていくことは推察できるが、核となる目的はその言語に触れる機会を増やしていくことにあると考察している。

言語習得においては、多くのインプットが欠かせないことは誰もがうなずくところである。そのためには、学習環境や学習者の学習動機がある程度整っていることが鍵となる。しかし、どの言語でも多様な学習環境が考えられるが、目標言語に浸って学べる環境、すなわちイマージョン教育のような環境ばかりではないはずだ。特に、この数年の新型コロナウイルス感染拡大の影響から人々の交流が制限されている現在、本来自由にできていた出入国も依然として厳しく管理されていることを考えると、目標言語のインプットは更に限られてきている。

そのような環境下で人々の交流を通じた言語インプットは制限されても、出版物、オンライン上の読み物や電子書籍からのインプットは制限を受けることが

少ないため、目標言語に触れることができる非常に有効な手段の一つである。このコロナ禍においても、多読でのインプットを通して学習者のモチベーションの向上を促し、ひいては「読む」という技能を育成することにも繋がっていくのではないだろうか。

3. 多読のために必要な準備

多読活動としての形態は授業内多読、授業外多読やその併用型、自律型多読等いくつか形態はあるが、どのような形態においても学習者が読み物の選択肢を与えられていることが理想的である。刊行されている代表的な日本語多読用の読み物は、以下のようなものがある。

- ・レベル別日本語多読ライブラリー にほんご よむよむ文庫 シリーズ (2006年より刊行、アスク出版)
- ・にほんご多読ブックス シリーズ (2016年より刊行、大修館書店)
- ・どんどん読める！日本語ショートストーリー シリーズ (2017年、2018年に刊行、アルク出版)

上記のレベル別の読み物は一例であるが、授業内・授業外多読、個人的な読みであるにしても、前述したようにある程度の読み物が準備してあることが多読活動の前提として挙げられる。それぞれの読み物を見てみると、入門、初級、初中級、中級レベルの読み物は充実している印象を受けるが、中上級レベル以上のもの (NPO 多言語多読のレベル分けのレベル5にあたるもの) はまだまだ種類が豊富にあるとは言えない。現在製作途中かと思われるが改善の余地があると考えられる。中上級以上のレベルの言語運用能力を持ち合わせていれば一般書籍でも読めるのではないかと考えられがちであるが、全ての中上級以上のレベルの学習者があ程度のまとまった文章にすぐに対応できるとは言えない。それは技能別の能力に差が生じていたり、単純に読むことに慣れていなかったりする場合もあるからである。

多読をしている学習者をサポートする存在は、支援者と呼ばれる。多読を行う上では支援者は学習者を励ましたり、止まっている読みが進むよう導いたりする、重要な存在である。また、支援者は学習者に対して読み物をリソースとして紹介する立場でもあるが、そのためには支援者自身がレベルに適した読み物や書籍情

¹ ブックトークとは、学習者各々が読んだもののあらすじや内容、おもしろさについて語り合い、感想や意見を交換したり、共有したりする時間のことである。本稿ではオンライン上でブックトークを行うことを、「オンライン多読ブックトーク」、「オンラインでのグループブックトーク」、または「オンラインブックトーク」としている。

報を整理して提供できる状態になければならない。ある程度多読向けの書籍や、オンライン上の読み物を含め、情報を把握しておかなければ多読に取り組む学習者に提供できる題材となるものを提示することは難しい。支援者のファシリテーションの知識や手法も課題となってくるところが大きいと言える。

4. 日本語学習者の多読学習についての認知度と多読のルール

多読用の読み物はオンライン上にも存在しているが、その存在を知る日本語学習者は、あまり多くはないように感じられる。その理由は言語学習における多読の認知度の影響もあるのではないだろうか。

筆者は現在、隔週でオンラインでのグループブックトークを実践している。ブックトークは個別で多読の読み物を読んだ後に行う。表1はそのブックトークを思案していた際に行った、事前アンケートの結果の一部であるが、これまで外国語学習での多読経験の有無について問うたところ、「ある」と答えたのは、全20名中3名で、「ないが聞いたことはある」と答えた人も3名に留まった。多読学習の認知度については決して高いとは言えない。アンケートに回答した国籍の内訳は、中国6名、韓国2名、タイ10名、ベトナム1名、ネパール1名となっている。

表1. これまで外国語学習で多読に取り組んだことがあるか

ある	ない	ないが、 聞いたことはある
3名	14名	3名

また、多読には実践するにあたってのルールが存在するが、それについても「言語を勉強しているのに、そんなありえないルールでやるのですか」という意見を述べる学習者もいた。それも、多読学習の認知度の低さが少なからず影響を及ぼしているのではなかろうか。

日本語多読のルールについて触れると、多くの場合、以下の4点が挙げられる。これらのルールは英語多読のルールを応用させたものであり、NPO多言語多読が推奨しているルールである。

ルール1「やさしいレベルから読む」

ルール2「辞書を引かないで読む」

ルール3「わからないところは飛ばして読む」

ルール4「進まなくなったら、他の本を読む」

(栗野他, 『日本語教師のための多読授業入門』, 2012, pp.16-20)

現在実践しているオンラインブックトークでも、上記の4点を採用した。その事前説明の際、学習者が引っかけかかっていたところは、やはりルール2とルール3であった。

特にルール2の辞書の使用を控えることについては先行研究でも指摘されることが多い点であり、桂(2019)は「辞書を引いてでももっと難しいものを読みたいという思いが強く多読のルールが読書の不自由さになってしまっていたこと、楽しんで読めるような本と出会えなかった可能性があること」(p.310)についても触れている。

多読はストーリー性のある内容が扱われることが多いので、説明の際、または多読活動を通して、例えば映画を鑑賞している時に母語でもわからない言葉が出たらその時辞書を引くのか、仮に辞書を引いたとして、その後映画に戻りストーリーにスムーズに入り込むことができるか等、例を挙げながら学習者と対話を重ねる必要がある。

まだ実践中ではあるが、初めの回ではルール3についても「飛ばして読むとよくわかりません」と抵抗感を覚えていた学習者も、ルールに従った読み方で2か月ほど経過してからは、「漢字など難しくてわからないところは飛ばしていますが、内容は大体理解できています」と日本語をそのまま捉えようとしている姿も見受けられた。

5. 日本語多読から繋がる活動

多読活動として読んでインプットの機会を増やすことはもちろん重要なのだが、読後の活動があるからこそ多読の持つ意味が大きくなることもある。今夏NPO多言語多読によって開催された第10回多読支援のオンラインセミナーに参加した際、多読実践を年単位で継続している学習者の一人が、「ブックトークが一番楽しい」と話していたのが実に印象的であった。

多読学習でなくとも、普段の生活においても人間は情報や感情の共有、更に大きな枠組みで言えばコミュニケーションを求める生き物である。そのような作業を人間は無意識に日常的に組み込んでいる。自分が関心のある小説や漫画、雑誌等の書籍、映画やドラマ、オンライン上の動画を他人にも勧め、感想や楽しみを共有するために言語を駆使するわけであるが、多読はそのような人間の好奇心を上手く突いた活動でもあるのかもしれない。

多読で読み物を読んだ後、考えられる活動は以下のようなものがある。

- 1) ブックトーク (オンラインも含む)

- 2) 聞き読み (読み聞かせ)
- 3) ピア・リーディング
- 4) (母国の昔話を紹介する等の) プレゼンテーション
- 5) 劇
- 6) 創作

1) のブックトークについては、筆者もオンラインで実践し3か月弱経過しようとしているところである。「ブックトークがあるから、読もうかなという気持ちになる」と言う学習者も数名いるため、日本語に触れる機会として日本に在住している学習者はもちろん、特に日本語を理解、または使用する機会が限られている日本国外の在住者にとっては意味のある時間になっているのではないだろうか。

2) の聞き読みについては、片山 (2015) が実践した授業の中で、好きな本紹介・読み聞かせというものがあった。その際のアンケートで『『クラスメートへの読み聞かせは役に立った』『聞いたたり、声に出して読むことで日本語のリズムが身についた』の2項について、9名中3名の学生は『わからない』『あまり』を選び、6名は肯定的な答えをしていた」(p.53) とあった。学習者の反応として肯定的な答えを選んでいたことを考えると、聞く方も読む方もインプットとアウトプットの工程を通してそれぞれの能力に影響があったことが考えられる。多読向けに作られている読み物の多くには、音声データが付属している場合も多く、文字を読むことに抵抗がある学習者に対しては有効的なのではないかと考えられる。

3) のピアで行う活動もブックトークに近いものがあるが、話題を共有し理解を深めやすい。池田・館岡 (2007) が実践した例で、「それぞれの理解が独立に形成され深められるというよりも、一体となって共構築され、また深められて」(p.60) と述べている。共に学ぶ仲間が存在することでそれぞれが持っているものを引き出し合い、また高め合うことは、ピア・リーディングを通しての読解力だけではなく、その他の技能の育成に繋がる協働性の高い活動として応用できる。学習者主体の授業運営に近づけるためのアプローチとして、現在活発に実践研究が行われている分野の一つでもあるだろう。

4) のプレゼンテーションは、言語学習において総合的な能力を伸ばすために効果的な手法である。自分の既知情報をその情報を知らない相手に語る際、人間は自然と積極的にそれを伝えようとする傾向がある。

多読活動から繋がる活動を考えると、読んだ本の続きを考えてみたり、4) のように母国の昔話を紹介してみたりすることは、一度インプットしたものを別の手段でアウトプットするという一連の作業で既知情報と未知の情報を整理することにも繋がる。また、学習者が自国の物語を冊子形式で作成したものを学習者同士で読み合うのも、学習者のレベルでの産出が行われている。そのため、広い意味では多読のための読み物となる可能性も秘めている。実際に、アメリカのスミス大学の学生が作った読み物が、多読の読み物としてインターネット上で公開もされている²。

5) の劇は、多読で読んだ本のあるひとつのグループで劇として演じることで、ストーリーのより深い理解に繋がる。更にセリフを覚えて発話することで処理の負担は大きい可能性もあるが、インプット作業とアウトプット作業の繰り返しで言語形式の定着、または言語活動の広がり結び付くことも考えられる。それは、松井 (2014) が、「個別に多読を行うだけでなく、多読をドラマの形で表現する活動を行うことにより、多読活動に対する動機づけが大きく高められただけでなく、『読む』活動が『聞く』『話す』にまで広がったと考えられる」(p.26) と述べているところを見ても、確認することができる。

6) の創作は、多読とは関係がないのではないかと捉えられがちであるが、多読後の活動として意義のあるものだと考えられる。それは4) で扱った学習者が作成した作品が多読用の読み物に繋がることにも関係するがそれだけではなく、その他の面でも池田 (2018) は、特に発話スタイルとオノマトペの面から考察し指摘している。

登場人物の性別や年齢によって発話のスタイルを決めていくことも必要となった。(中略) いわゆる標準的な表現を紹介しつつも、多くの作家が独自のオノマトペを用いて表現してきたように、学習者にも標準的な表現からあえて逸脱する自由があることを議論した。一つの言葉を選ぶ際に、通常の日本語授業で重視する『普遍性』や『適切さ』といった尺度とは異なり、独創性や世界観といった観点からの言葉選びが必要であった。

(池田, 2018, p.9)

一般的な授業では深く触れられないような発話スタイルやオノマトペは、日本語母語話者に無意識的に身に付いているものである。それを理解しようとし、使

² JAPANESE TADOKU BOOKS BY STUDENTS Smith College Tadoku Project 「YOMU YOMU 学生の多読本シリーズ」
<https://sophia.smith.edu/japanese-book-review/books-by-students/> または、「Stories by levels」
<https://sophia.smith.edu/japanese-book-review/stories-by-levels/> を参照。

用してみるという姿勢は日本語学習者にとって日本語で自己を形成する際に必要なことではないだろうか。言葉のチョイスは学習者その人を創り上げていくことに繋がるからである。

6. 日本語教育における多読の今後の課題

まず学習者の言語学習の選択肢として、多読の認知度を高めることが挙げられる。これは多読学習がある程度定着している英語教育とは異なる点であり、教育としての認識をより高めていくことが必要になる。日本語よりレベル別の読み物が豊富な英語でさえ、多田他(2007)は、「学生の英語リーディングの取り組みを増やすためには、英語リーディング(多読)を授業カリキュラムに組み込むことが考えられる」(p.136)としている。まだ読み物が豊富でない日本語教育分野においては、柔軟に現場で扱い、それを学習者や教師にも広め取り組みを増やすことで、認知度を高めることもなお必要になってくるのではないか。

また、レベルのわかりやすさも重要になってくるだろう。日本語教育における多読では、以下の表2のような、NPO多言語多読が提示しているレベル分けに準じているものが多い。

このレベル分けについては、大修館書店の「にほんご多読ボックス」シリーズも同様であるが、他の多読の読み物、例えば前述した、「どんどん読める!日本語ショートストーリー」シリーズは日本語能力試験N3程度のレベルと提示してある。また、ウェブ上の読み物も見てみるとレベル分けに関してはややばらつきがあり、統一性がない印象を受ける。例を挙げれば、JGRPG(Japanese Graded Reader Project Group)が開発している読み物のレベルはAからHの8段階で

あり、語彙数や字数で先ほどのNPO多言語多読のレベル分けと照らし合わせながらレベルを判断する必要がある。くろしお出版が提供している日本語多読道場では、主に日本語能力試験N1～N5程度というレベル提示をしているが、他の多読用の読み物のレベルと対照できるよう表にまとめてある。このことから、日本語教育においての多読の読み物レベル分けは統一されていないものも多いことがわかる。日本語能力の証明に大きく関わっている日本語能力試験のレベルか、多読を推奨しているNPO多言語多読のレベル分けを基準とし、それらが相互に参照できるようになれば、学習者の本を選ぶ際の助けになるのではないかと推察できる。

この点を英語多読の読み物と比較してみると、やはり独自のレベルの目安を設定しているところも多いが、興味深いのはCEFR³を参照できるようにしている出版社もあることである。CEFRは世界の各言語で取り入れられている共通の指標で、日本語教育でもその指標を参考にしたJF日本語教育スタンダードが開発されたのは記憶に新しい。JF日本語教育スタンダードの基準をレベルの目安とするのも、他言語とのレベルも対照できるため汎用性は高いと言えるだろう。

課題の3点目は、オンラインブックトークでの発言のしにくさについてだ。オンライン上で初めて顔合わせをする学習者達にとっては、ホスト側が「みなさん、どうですか」という抽象的な投げかけをただけでは、話は広がりにくい。しかし、ブックトークは読んだその話についてストーリーを共有した後それぞれの感想や共感ポイントを探りながら進めることが多いため、参加者の発言が必要不可欠となる。ブックトークに限らず、オンライン上でのミーティングにおいては、このように発言がしづらい場面が多々起こる。このコロ

表2. NPO多言語多読による、日本語多読のレベル分けの目安

	Level0	Level1	Level2	Level3	Level4	Level5
概要	入門レベル	日本語能力試験N5レベル	日本語能力試験N4レベル	日本語能力試験N3レベル	日本語能力試験N3～N2レベル	日本語能力試験N2～N1レベル
語彙数	350	350	500	800	1300	2000
字数(1話)	0～400	400～1500	1500～3000	2500～6000	5000～15000	8000～25000
文法項目	現在形、過去形、疑問詞、～たい等	現在形、過去形、疑問詞、～たい等	辞書形、て形、ない形、連体修飾、～と(条件)、～から(理由)、～なる、～のだ等	可能形、命令形、受身形、意向形、～とき、条件表現、～そう(様態)、～よう(推量・比喩)等	使役形、使役受身形、～そう(伝聞)、～らしい、～はず、～もの、～ようにする/～ようになる等	機能語、複合語、慣用表現、敬語、～わけにはいかない、～につれて等

(にほんごたどく 多読について 参考資料 レベル分けについて 「レベル分けの目安」参照)

³ Common European Framework of Reference for Languagesの略で、日本語ではヨーロッパ言語共通参照枠。

ナ禍でオンラインツールの利用は急速に伸びてはいるが、その一方でオンラインツールを使用した授業やミーティングの運営は未だ手探り状態であり、指示の明確化、運営側のファシリテーション能力といったものが一層問われる事態となっている。

ここまで、日本語教育における多読の概念から現在の課題に至るまで考察を重ねてきた。多読は言語学習の一つの方法であるが、その形態は様々である。日本語教育での多読学習はまだ大きく取り入れられることが多くなく、歴史的にも浅い部分があるかもしれない。だからこそ、これから実践と検証を進めていくべき分野の一つであるとも考えられる。このコロナ禍でオンラインツールを用いた授業、ミーティングの需要が急激に高まったが、その運営については課題も多く、オンラインでの多読活動においてもそれは同じことが言える。様々な面からも開発の途中段階であることを考えると、多読が持つ教育可能性は決して軽視できるようなものではない。

参考文献

- JAPANESE TADOKU BOOKS BY STUDENTS
Smith College Tadoku Project 「Stories by levels」
<https://sophia.smith.edu/japanese-book-review/stories-by-levels/> (最終閲覧日:2021年10月27日)
- JAPANESE TADOKU BOOKS BY STUDENTS
Smith College Tadoku Project 「YOMU YOMU 学生の多読本シリーズ」
<https://sophia.smith.edu/japanese-book-review/books-by-students/> (最終閲覧日:2021年10月27日)
- JF 日本語教育スタンダード「CEFR とは」
<https://jfstandard.jp/cefr/ja/render.do> (最終閲覧日:2021年10月17日)
- JGRPG 「Library」
<https://jgrpg-sakura.com/library/> (最終閲覧日:2021年10月17日)
- NPO 多言語多読 NPO 多言語多読 BLOG 多読支援セミナー「第10回 多読支援セミナー 報告 その①」
<https://tadoku.org/blog/blog/2021/08/06/11166> (最終閲覧日:2021年10月8日)
- Oxford University Press 「Oxford Bookworms Library」
<https://www.oupjapan.co.jp/ja/gradedreaders/bookworms.shtml> (最終閲覧日:2021年10月23日)
- Oxford University Press 「Oxford Graded Readers」
<https://www.oupjapan.co.jp/ja/gradedreaders/index.shtml> (最終閲覧日:2021年10月17日)
- Penguin Readers (2019) 「Penguin Readers Handbook」
https://www.penguinreaders.co.uk/wp-content/uploads/2019/09/PR_ReadersHandbook_Main-1.pdf (最終閲覧日:2021年10月23日)
- 栗野真紀子・川本かず子・松田緑 (2012). 『日本語教師のための多読授業入門』. アスク出版.
- 池田庸子 (2018). 「多読から創作へー中級日本語学習者を対象とした多読授業における試みー」, 『日本語教育方法研究会誌』, Vol.25(1), pp.8-9.
- 池田玲子・館岡洋子 (2007). 『ピア・ラーニング入門ー創造的な学びのデザインのために』, ひつじ書房.
- 江利川春雄 (2018). 『英語教育史重要文献集成 第6巻』, ゆまに書房.
- 大越貴子 (2019). 「入門・初級レベルにおける授業内多読に関する一考察: 読書コミュニティの出現と効果」, 『拓殖大学日本語教育研究』, No.4, pp.77-100.
- 岡山県立図書館 英語多読コーナー シリーズ別ブックリスト (2018) 「Penguin readers 所蔵リスト」
https://www.libnet.pref.okayama.jp/service/jinbun/gaikoku/tadoku/booklist/penguin_readers.html (最終閲覧日:2021年10月2日)
- 片山智子 (2015). 「日本語で『多読』を楽しむー自分の読みを表現する授業ー」, 『日本語教育方法研究会誌』, Vol.22(1), pp.52-53.
- 桂千佳子 (2019). 「日本語初級後半～上級クラスにおける多読授業実践報告ーケーススタディから見えた課題 支援の一助としてー」, 『マテシス・ユニヴェルサリス』, 第20巻 第2号, pp.293-321.
- 株式会社アルク 書籍 日本語読解 「どんどん読める! 日本語ショートストーリーズ vol.1」
<https://www.alc.co.jp/entry/7017046> (最終閲覧日:2021年10月29日)
- 株式会社アルク 書籍 日本語読解 「どんどん読める! 日本語ショートストーリーズ vol.2」
<https://www.alc.co.jp/entry/7017047> (最終閲覧日:2021年10月29日)
- 株式会社アルク 書籍 日本語読解 「どんどん読める! 日本語ショートストーリーズ vol.3」
<https://www.alc.co.jp/entry/7017048> (最終閲覧日:2021年10月29日)
- 多田昌夫, Vigatis Brad & 正木美知子 (2007). 「英語多読指導のパイロットプロジェクト: 英語リーディングキャンペーンー自立した読み手の育成を目指してー」, 『国際研究論叢: 大阪国際大学紀要』, Vol.21(1), pp.127-139.
- にほんごたどく 本を探す 「NPO 多言語多読監修の学習者向けレベル別読みもの レベル別日本語多読ライブラリー にほんご よむよむ文庫」
<https://tadoku.org/japanese/graded-readers/> (最終閲覧日:2021年10月29日)
- にほんごたどく NPO 多言語多読監修の学習者向け

レベル別読みもの本を探す「無料の読み物」
<https://tadoku.org/japanese/free-books/>（最終閲覧日：2021年10月2日）
にほんごたどく 多読について 参考資料 レベル分けについて「レベル分けの目安」<https://tadoku.org/japanese/levels/>（最終閲覧日：2021年10月

17日）

日本語多読道場「読む前に」<https://yomujp.com/yomumaeni/>（最終閲覧日：2021年10月17日）
松井咲子（2014）. 「ドラマ的活動を取り入れた多読の実践報告－Reading Communityの構築を目標として－」, 『ICU日本語教育研究』, No.11, pp.21-27.